白樺文学館について

雑誌『白樺』を中心に展開された白樺派は、大正デモクラシーの時代の新しい文芸活動です。当時、白樺派の中心人物の志賀直哉、武者小路実篤、柳宗悦らが我孫子に住み、多くの同人や信奉者が来訪。我孫子は、やはり文学者の多い鎌倉と並び称される文士村でした。

美しい手賀沼の自然環境から創造活動のエネルギーを受けて、彼らは我孫子で多くの優れた作品を創り上げました。また、文学にとどまらず絵画や彫刻などについてもその時代の一番良い芸術を先取りし、ロダンや印象派の絵画などを積極的に紹介したのです。

当時の文化をリードした白樺派が、手賀沼のほとりで育まれ、大きく発展したことは、我孫子の素晴らしい文化的財産です。

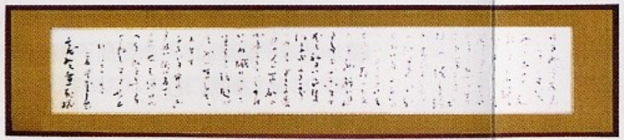
『白樺文学館』は、そんな活動を広く皆様に知っていただき、また、次代に伝えていくために創立されました。

そして、これからの新しい時代に、白樺派のように文化をリードする活動を、この我孫子の地から発信していく拠点となれれば、これほどうれしいことはありません。特に次の時代を担う若い皆さんに、白樺派の活動に触れ、その精神を受け継いでほしいと思います。

白樺文学館館長　佐野　力

ロダン
「鼻のつぶれた男」
1916年有島生馬入手
ロダンは白樺派の人々によって日本に紹介されました。

志賀直哉から小林多喜二宛書簡
多喜二は当時弾圧を受けたプロレタリア作家。
直哉は作品を公正に評価し、激励を寄せています。



夏目漱石から志賀直哉宛書簡

竹久夢二「梅花美人」
大正時代の美術を代表する竹久夢二の叙情画。

民芸運動の作品

柳宗悦は我孫子で「民芸」活動を始めました。

バーナード・リーチ
鉄絵魚紋花瓶

河井寛次郎
白地双掌陶板

濱田庄次
鉄釉描草紋方長壷

芹沢　銈介
型絵染着物

このPDFは FinePrint pdfFactory Pro 試用版で作成されました http://www.nsd.co.jp/share/